

2014年6月15日 礼拝メッセージ

聖書：第二サムエル記6章1～11節

説教：不敬の罪のために

1 事件が起きる前のダビデ

1) 神の箱／主の箱

今日の箇所のできごとは、神の箱、あるいは主の箱と呼ばれるものが大きく関わっております。神の箱はモーセの時代にイスラエルに与えられたものでした。モーセは主から十戒を与えられ、その十戒を刻んだ二枚の石を契約の箱と呼ばれる箱に入れるようにと命じられました。それ以来、契約の箱はイスラエルにとって神の臨在を現すものとして大切に扱われました。この箱のことでウザという人が死んでいきます。誰でも疑問に思うでしょう。なぜ彼は死ななければならなかったのか。今日はそのことを考えていきます。

事の発端は、ダビデの計画から始まります。彼はイスラエルの王となり、エルサレムを新しい都に定め、そこへ宮殿を建てていきます。敵であるペリシテ人を追い払い、戦いに勝利し、これ以上何も言うことのない理想的な船出をします。いっぽう彼は、神の箱がバアラという村に置かれたままであることを忘れてはいません。あの箱をエルサレムに運ばなければならぬと考えました。今の時代なら、政治と宗教は一緒にしてはいけないという原則があります。しかしダビデの時代には、宗教と政治は別々のことではなく、この二つは切り離すことができないほど密接なものでした。そもそも神が、ダビデをイスラエルの王としたのです。ダビデはそのことを知っています。神の御臨在がなければ自分はイスラエルの王として努めを果たすことができない。そのことを自覚しているので、神の箱

をエルサレムに運び上ることにこだわります。

2) 周到な準備

そのためにダビデは三つの準備をしています。まず一つ目、イスラエルの精鋭三万人を集めました。みすばらしい姿の兵隊がとぼとぼと箱をかついでいったのでは、まったく格好が付きません。なにしろイスラエルの神です。神の威厳にふさわしく、礼服に身を包んだ兵士が激かに行進していく。そのような演出をします。

二つ目。神の箱をどのようにして運ぶか。手でかついで運ぶのではなく、わざわざ新しい車を作らせ、この車を牛に引かせて運ぶことにします。今なら、黒塗りの高級車というところでしょう。

三つ目。5節にあります。「ダビデとイスラエルの全家は歌を歌い、豎琴、琴、タンバリン、カスタネット、シンバルを鳴らして、主の前で、力の限り喜び踊った。」歌と踊りの盛大なパレードです。このように見ていくと、神の箱をエルサレムに運び上るとき、ダビデはこれをお祝いしようと国を挙げて一生懸命努力をしたのがわかるでしょう。ここだけ見ると、さすが信仰者ダビデと感心したくなります。

2 ウザ打ち事件

さて準備は整い、当日を迎えます。車を丘の上にあるアビナダムの家に向かわせ、箱を車に載せます。その車の前にはアフヨが立ま

す。彼は牛の口につけたひもを握り、車をコントロールする役割です。そして車の後ろにはウザが立っています。丘の上から下る道ですから、ブレーキが必要です。ウザは車につけたひもを握り、速度が出すぎないようにブレーキ役をしていたのかもしれませんが。アフヨとウザが息を合わせて車を制御する。そんな段取りでした。

ナコンの打ち場まできたとき、予想外のことが起きてしまいます。牛が何かに驚いたのか車が暴走し始めます。神の箱が車から落ちてひっくり返りそうになりました。国中の人たちが見ているパレードです。そのパレードの最中に神の箱がひっくり返る。もしそんなことになったなら、ダビデの面目は丸つぶれ。王としての名誉に傷がつきます。ウザは、とっさに手を伸ばして箱を押さえました。次の瞬間、何が起きたのか。7 節。「すると、主の怒りがウザに向かって燃え上がり、神は、その不敬の罪のために、彼をその場で打たれたので、彼は神の箱のかたわらのその場で死んだ。」

ウザは神の怒りを受けて死んでしまいます。ウザが悪意をもって何かをしたというのならわかります。ところが彼は、自分の職務を忠実に果たそうとしただけです。だいたいにしてこの事故はなぜ起きたのか。ウザに事故の原因があったのか。アフヨが牛をきちんとコントロールできなかった、そこにも原因があるのではないか。少なくともウザだけが悪いとは言い切れない。それなのに神の箱に手を触れたというだけで殺されてしまう。なんとも理不尽で納得いかない。

3 事件後のダビデ

1) 「激した」(怒った)

ダビデがこの事件をどのように受けとめていったのか。そこから、どうしてウザが死ぬことになったのかを考えていきます。

8 節の最初にこうあります。「ダビデの心は激した。」日本語訳では少しわかりにくいでしょう。英語の聖書ではもっとはっきりと、「ダビデは怒った」と訳しています。いったい何に対して怒ったのか。誤解しないでいただきたいのですが、神の箱に手を伸ばしてしまったウザに対してダビデが怒っているわけではありません。ダビデの怒りの対象は、主が怒ったことにあります。主がウザを殺したことを、ダビデも納得できなかった。ダビデも私たちと同じように疑問に思ったのです。それで、ダビデは怒ります。

私たちが知っているダビデは、だいたいこんなイメージでしょう。いつも信仰深くどんなときにもまず主に伺い、主に従う。それがダビデ。そんな姿を見てきましたから、ダビデが神に対して怒りをぶつけた聞いて驚きます。信仰深い人は、神をいつも信頼して疑わない人。いつの間にかそんな図式が頭の中に出て上がっています。そんなことはありません。

例えば、こんな場合はどうでしょうか。あつてほしくないことですが、例えば、自分の息子が目の前で死んでいくとします。そのとき親は、「これも神の御心です」と言って納得しますか。そんなことはないでしょう。「どうして息子のいのちを奪うのか。神は何と冷酷なことをするのか」と、神に怒りをぶつける。それが当たり前ではないですか。神を信頼するからこそ、ダビデは神にそのままストレートに怒りをぶつけていきます。

2) 「破る」ペレツ・ウザ

そこまではよいでしょう。問題はここから先です。ダビデはその後どうなったか。ダビデが、この事件が起きた場所に「ペレッツ・ウザ」と名づけたことに目を留めてください。日本語に訳せば、ウザが割り込んだという意味にもなり、また神がウザに割り込んだ、どちらともとれる意味になります。

この「ペレッツ」という言葉、ここで初めて出て来たのではありません。5章20節を読みます。「それで、ダビデはバアル・ペラツィムに行き、そこで彼らを打った。そして言った。「主は、水が破れ出るように、私の前で敵を破られた。」それゆ彼は、その場所の名をバアル・ペラツィムと呼んだ。」この箇所では、「ペラツィム」となっていますが、これも「破る」という同じ言葉です。偶然ではありません。主は二つのできごとを通してダビデの何かを取り扱われていきます。

3) 恐れた

ダビデは次第にそのことに気がつきます。そのことは、9節の言葉の中に表されています。「その日ダビデは主を恐れて言った。「主の箱を、私の所にお迎えすることはできない。」

ダビデは、主の箱をエルサレムに置くことが自分の努めであると確信していました。そのために一生懸命努力して準備しました。その彼が、「主の箱を、私の所にお迎えすることができない」と言って、急に弱気になっています。なぜか。パレードの最中に大きな事故を起こしてしまった。王として面目が丸つぶれになった。国中は大騒ぎです。これはまずいということで、人々のうわさや批判がおさまるのを待ったのか。冷却期間をおいたのか。

冷却期間が必要だったのは、人々のほうではなくダビデのほうでした。彼は、最初こう思っていました。自分は主のために十分なことをした。主の前にやましい所は何もない。それなのに神はなぜ割り込んで邪魔をするのか。そうして神に対して怒りをぶつけた。

でもダビデの心が落ち着かない。騒いだままです。そのうち、じょじょに心が刺されていきます。そして気がつきます。今回の計画、すべてが神のためです、純粋な動機からですと胸を張って言えたのか。

なぜ三万人の精鋭を集めたのか。なぜ新しい車を作らせたのか。なぜ盛大な音楽や踊りで賑やかにパレードしようとしたか。主のためと言いながら、自分のためではなかったのか。今自分はイスラエルの王となった。そのことを誇りたかったのではないか。主のためと言いながら、自分のためにしていた。主の目はごまかせないのです。そんなダビデの罪を最初から見抜いていた。そのことに気がついたとき、ダビデは主を恐れ始めます。こんな自分が主の箱をエルサレムに運べない、そんな資格がないと思い始めます。

そうなる、この事件で死ななければならなかったのは誰なのか。ウザではありません。罪を犯したダビデが死ぬべきだった。ウザはダビデの罪の身代わりとなった犠牲者です。ダビデは、最初それがわからず、神に怒りをぶつけました。でも良く考えると、本当の犠牲者はウザであって、自分はウザのおかげで生き延びることができた。さばかれなければならないのはこの自分である。そのことに気がつきました。

ダビデは、ウザが死んだ場所を「ペレッツ・ウザ」と名をつけ、記憶にとどめようとします。イスラエルの王となって高慢となり、神

の箱を利用して自分の栄光を求めようとしたダビデに、主が割り込み、罪を示した場所です。ダビデの身代わりとなって死んだウザ。ダビデにとって恥ずべき場所です。普通なら記憶から消し去りたい場所です。でも、忘れてはならないのです。

十字架も同じです。罪を犯し、死ぬべきは神のひとり子ではない、私たちでした。けれども、主が身代わりとなって死んでくださった。それが主の十字架です。私たちも、この十字架を生涯忘れてはなりません。記憶し続けてまいります。